国際医療協力
海外だより 192

技術を伝える人々から学ぶこと

国立国際医療研究センター　国際医療協力局　連携協力部
展開支援課　西岡　智子

大学時代のある日、ゼミの教授に勧められた一冊の本、「村に灯がついたーヒマラヤ・チョモロン村に電気をつけた日本人の記録」（林克之　山と渓谷社）。これが私の国際協力、特に技術支援の「現場」に触れた最初の書籍である。それまでは、開発経済学のゼミで政府開発援助（ODA）の政策や開発途上国の経済成長モデルなどの授業や本を読んできていた。しかし折に触れ教授が、「途上国の現場はこんなこととは全然違う。日本のピカピカのトイレとは異なる途上国のトイレの中で、それでもこの仕事を続けたいかをよく考えてほしい」とおっしゃっていたのがいつも私の心に残った。

そんな時に紹介されたのが前述の本である。この本は、1980年前半にヒマラヤの麓のチョモロン村に滞在し、日本の中古の自動車部品や発電機、現地で手に入る資材を駆使して水力発電に成功し、無灯だった村のすべての世帯に灯をともした日本人の話である。

電気整備士でもなく、発電の専門家でもない林氏が、出稼ぎ労働者のように日本で数か月働いてお金を貯め、残りの期間をチョモロン村で一村民として生活しながら試行錯誤で水力発電を構築していく。その姿に共鳴した日本人の専門家が手助けをし、村民も少しずつ協力していくようになった。そして、何年にもわたり失敗を繰り返しつつもついに灯がともる日が訪れる。感動的な話だが、学生時代に読んだ当初は、電気を通すという、日本では当たり前の技術を導入するためだけに、なんて非効率で、スマートさに欠けるやり方だろうと思った。しかし読み進めていく中で、「村人が電気を必要としているかどうかの気持ちの確認、態度から知りたい」、「灯った電球の光は小指の先ほどの小さなものだがヒマラヤでのこの輝きは力強い希望の最初の光」と丁寧にひとつずつ積み上げながら村民の信頼を得るまで、「援助」ではなく「共同作業」という形で村民と一体となって成し遂げるプロセスに圧倒された。

それから時は経ち、国際保健の分野で仕事をする機会に恵まれた。その中で、2021年、また地元の人とともに電気に関係するプロジェクトを知ることになった。私が所属する国立国際医療研究センター国際医療協力局が開催しているL'amicale de la Santé en Afrique Francophone（LAF会）で紹介された事業である。今回はスタートアップ企業が取り組んだ事業だが、社長の思いにとても熱いものを感じた。

低・中所得国の電気がない地域では、夜間の出産は暗闇の中で行われる。当然のことだが、昼間の分娩介助に比べてリスクは高く、母子を危険にさらす。その企業の社長は「暗いだけで亡くなる母子がいる」という状況を課題に据え、保健分野での電気通信事業を進め、母子の命を救うことから始めると決意。折り畳み式太陽光パネルなどを駆使して、公立の未電化診療所に早朝・夜間を照らす明かりを導入した。

このプロジェクトで私が感銘を受けたのは、この事業がアフリカの現地の人々と一緒に現地生産と現地保守を行うことを掲げていることだ。現地で一緒に生産するための場所を構え、すべて現地の人々が

主体となって関わることができるようにアレンジされている。講演では「Made in Africa with Japanで信頼を掴む」と語られた。

この事業はもちろんビジネスで取り組まれているので、40年前のチョモロン村のボランティア事業とは異なる技術の高さ、スマート感をもったお話だった（もちろん、それまでの過程でのご苦労は計り知れないとは思うが）。しかし、プロジェクトの底を流れる哲学は、チョモロン村の林氏と同じく住民とともに築き上げるということを第一に考えられていると強く伝わってきた。

私は今、仕事を通じて様々な製品や技術を低・中所得国に展開しようとしている企業の取り組みに触れる機会がある。もちろんその背景として、企業が販路拡大戦略のもと新たな市場を探す一環としての取り組みも多いだろう。一方で、若者が熱い思いで自らが開発した技術を駆使して低・中所得国の課題解決に取り組む話をまだまだ聞くことができる。

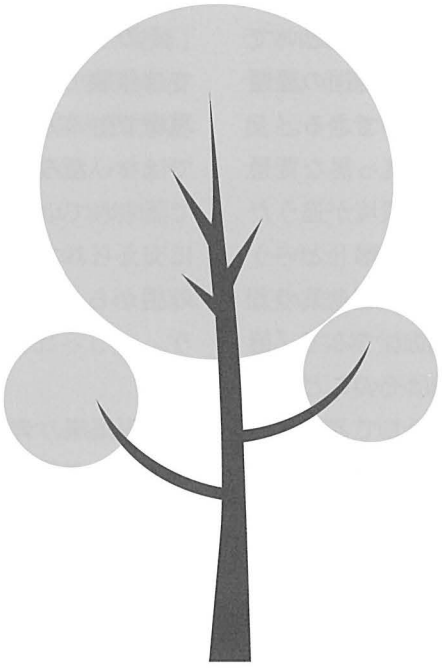
先日は、プレゼンテーションの中で真っ黒な背景に白と赤抜きの文字で「生まれた国や環境が違うだけなのにあまりに差がある医療格差に衝撃」というスライドからお話を始めたスタートアップ企業の方がいらっしゃった。その方は現地を訪れてみて「衝撃」を受けられたとのことだが、私はそのことに驚いた。インターネットやSNSなどを通じてどんな画像や動画にもアクセスできる今、多くの人は未知なもの、未経験なものへの「耐性」ができていて、そのように素朴な感情の揺れを抱くとは思わなかったのだ。

その方はご自分の有する技術や経歴、これまで築いてきたネットワークを活かして、「この状況を変えなければいけない」と熱く語られていて、次世代を担う人の熱い思いに心を打たれた。現地に足を運び、体感することのインパクトの大きさは、今でも変わっていないことを感じた瞬間だった。

私自身は、低・中所得国の現場を渡り歩いてきた経歴もなく、技術者として貢献できるだけの技術もスキルも持ち合わせていない。しかし、このように知識や技術が人から人に伝わる話、伝えたいと思う人の話を聞くと、ワクワクのおすそ分けをもらえる気がする。

そのワクワクする話の裏には、ネット情報やSNSでは体験できないその国のにおいや騒音を体感し、現場で生の人々の声を聞き語り合った経験があるのではないだろうか。スマートなプレゼンテーションで語られている技術の伝達も、そういった人間臭さに支えられているというのは、チョモロン村の発電の話から半世紀たった今も変わらないのかとも思う。

遠隔医療、デジタルヘルスなどグローバルヘルスの世界も日進月歩で新しい技術や製品が登場する。

「NCGM国際医療協力局が主催する国際医療展開セミナー」写真右下：西岡智子

これからは、日本から低・中所得国へ一方通行の技術支援の時代ではなく、双方向の時代になる日も遠くないだろう。技術が伝わるベクトルがどちらを向こうとも、人が人に伝える技術はやはり人間臭いプロセスを経てその国、その地域に定着していくといいなと思う。